

**福島第一原子力発電所事故被害者で  
原発いらない福島の女たち、  
福島事故告訴団代表**

**武藤類子さんからの手紙**



世界中で、福島原発事故の被害者に心を寄せ、つながり続けて下さる皆さま、ありがとうございます。

今年も3月11日が近づいてきました。今日もあの日のように、細かい雪が降りしきっています。昨年11月に起きた震度5弱の地震が、多くの人に311をフラッシュバックさせ、傷の深さを思い起こさせました。

今、福島では次々と避難指示が解除され、人々の帰還政策が推し進められています。しかし、この帰還は「安全になったから帰って下さい」と言うものではありません。「一応除染をしたから、まだ放射性物質はあるけれど我慢して暮らして下さい」と言う意味です。避難指示が解除されていく地域に、除染廃棄物が山積みされ、減容化のための焼却炉が作られています。3月末に解除となる予定の富岡町の平均の放射線量は0.65 $\mu$ Sv/hです。半数の人々は帰らない決断をしています。昨年解除になった檜葉町、南相馬市、葛尾村の帰還率は1割にも達していません。

帰還政策の中で国と福島県は区域外避難者の、住宅無償提供の打ち切りを強行しようとしています。

原発事故のために、人生を大きく変えられてしまった避難者たちが、この打ち切りが実行されると、住まいを失う、または経済的に困窮する、家族がバラバラになる、ようやく慣れた環境から出なくてはならない、望まない帰還をしなくてはならないなど更なる困難の中に置かれます。

一方、避難解除や、新たな企業誘致のために莫大な復興予算が投じられ、2020年までに避難者を0にするという福島県の目標のもとに、帰還困難区域の除染やモデル地域の建設を計画してします。第1原発から4kmのところに建設される双葉町アーカイブ拠点には、50億の予算が計上され、原発事故の様相を伝えるために高校生の修学旅行を誘致するということです。

原発事故は今も収束してはいないのです。

汚染水のタンクは今も増え続けています。期待された凍土壁はほぼ失敗だと言われています。第1原発1・2号機の120メートルある排気塔を支える鉄骨に生じたヒビや破断が増え、いつ倒れるか心配でなりません。2号機のデブリと思われる写真が公開されましたが、そこ650シーベルトだそうです。サイト内には何十年も人が近づけない場所が数多くあるのです。

福島県の子どもたちの甲状腺がんは疑いを含めて184人となりました。「甲状腺がん子ども基金」によると、福島県外の放射性ヨウ素が通った地域でも、重症化した甲状腺がんは見つかっています。放射能被曝による健康被害に誰もが不安を感じています。仮設住宅や避難先で鬱を発症する人が増えています。福島県の自殺率は2014年から急激に増加の一途を示しています。

若者たち、子どもたちに向けた放射能の安全キャンペーンが大変な勢いで繰り広げられています。昨年夏には、疑問だらけの放射能に対する教育施設が開設し、3万人の人が訪れています。暮れには福島県の高校生が第1原発の収束作業を見学に行きました。18歳以下は働けない場所です。

原発がひとたび事故を起こしたら、何百年もの間、土や海や山の木々は汚染され、人々の人権は奪われます。

危険と諦めと分断を強要され、生きる尊厳を傷つけられます。

世界のどの原発ももう動かしてはなりません。

原発はあらゆる命と共存はできません。

こんな悲惨な事故は福島で終わりにしなければなりません。

そのために、私たち被害者は立ち上がり、つながり、声をあげています。

今年は沢山の民事裁判が結審を迎えます。

事故の責任を問う刑事裁判も始まります。

どんなにかすかな光でも、心にキャンドルを灯し続けましょう。

新しい命の時代を創るために、それを望む世界の人々と福島の人たちはつながり続けます。